

2010年5月1日(土) 日本英文学会関東支部5月例会

ワークショップ「その素材、どう料理する?—教材徹底討論」

グループ1 課題テキスト Ernest Hemingway “Cat in the Rain”

ワークショップの記録

■ 進行

- [0] 13:00-13:10 全グループでの概要の確認
- [1] 13:10-13:15 インTRODクシヨN (山本)
- [2] 13:15-13:25 教科書での扱われ方 (田村)
- [3] 13:25-14:25 意見交換 *ひとり5~8分の報告
BREAK
- [4] 14:30-15:20 自由討論
- [5] 15:20-15:30 全グループ総括・意見交換

◆ 参加者 (10名)

上西哲男、小笠原亜衣、北和丈、木下裕太、倉林秀男、関戸冬彦、フェアバンクス香織、深谷素子、星久美子、森田英津子(敬称略)

◆ 司会

山本洋平、田村恵理

事前課題

各参加者には事前に以下の5項目(A~E)について課題を提示し、当日5~8分で発表してもらうこととした。

- A. 想定される授業。どのような授業のなかで“Cat in the Rain”を教材として使うのか。(対象学部、学年、スキル・レベル)
- B. どのくらいの時間をかけるのか。
- C. どのようにテキストを提示するのか?(予習方法や作家や時代背景の情報について。ボキャブラリの解説、翻訳の扱いなど)
- D. どのようにテキストを読むのか?(全行訳読?ポイントのみ?学生がつまづきやすいポイントは?英語教育につなげやすい箇所は?etc.)
- E. クラスを盛り上げるために、どのように運営すればよいのか?(盛り上げる/精確に読むための工夫、学生のハンドアウト作成への指示、語学的・文学批評的な設問、etc.)

[1] イントロダクション(山本洋平)

オーラル・コミュニケーションや実用性を重視する昨今の英語教育の現場において、文学素材は本当に「無用の長物」なのか。否、テキストを丁寧に読み、意見を交わす行為は、やりようによっては、実践的コミュニケーション教育につなげられるはずである。しかし、経験の浅い教員は、学生対応と教材選択という、大学院での研究活動とは必ずしも一致していない領域の能力を求められ、人知れず暗中模索しているのが実情なのではないか。しかも自分たちが慣れ親しんできた往年の訳読教育とは異なる授業運営が求められていたりする。文学素材を英語教育に活かすための新たなヴィジョンとはいかなるものか、本ワークショップで議論してみたい。

ボキャブラリのレベル、長さ、展開、議論のしやすさなどから見て、“Cat in the Rain”を「教材」として選択したが、この選択が適切か、より適切な素材はあるか、どのようなスキルの学生にたいして、どのようなタイミングでこの素材を提示すべきか、なども議論したい。本ワークショップのコンセプトに密接にかかわる近年の先行研究を以下に挙げる。

- 1) 関戸冬彦「工学部の学生を対象に The Great Gatsby を扱った授業実践報告」(口頭発表) 日本英文学会第 81 回大会, 東京大学駒場キャンパス, 2009 年 5 月 30 日.
- 2) 大森昭生「英文科以外のカリキュラムで『日はまた昇る』をどう学ぶか—授業実践を通して—」『ヘミングウェイ研究』10(2009. 6): 45-59.
- 3) 深谷素子「英語授業における文学作品活用の試み—教員の専門分野に偏らず、訳読偏重に陥らず、文学作品を生かすには何をすべきか」『成蹊大学一般研究報告』42(2009. 8): 1-19.

[2] “Cat in the Rain”の大学向け英語教科書における扱われ方(田村恵理)

日本の大学向け英語テキストで“Cat in the Rain”が扱われている以下の 5 冊を取り上げ、それぞれにおいてのこの作品の収録のされ方、形式的な意味での編集のされ方、訳註者、編註者によるこの作品の解釈、難易度についての報告と、Hemingway の短編作品のなかで教科書に扱われるものとしてどの作品が人気なのかについての印象を説明した。

- 1) 1959 年初版 南雲堂 『対訳ヘミングウェイ 1』 尾上政次、速川浩訳注
- 2) 1960 年初版 南雲堂 『The Killers and Other Stories』 崇谷嗣雄、大沼雅彦注釈
- 3) 1985 年初版 朝日出版社 『Modern American Masterpieces—現代アメリカ名作選』 江草久司、加藤光男、西村千稔、伊藤義生編注
- 4) 1995 年初版 金星堂 『The Little Girl and Other Stories—British and American Short Stories I』 安永義夫編注
- 5) 2004 年初版 三修社 『What It's About!—大学英語演習：リーディングとリスニング』 九頭見一士、夏目博明、Suzy Fukuda 編著

[3] 意見交換

(倉林秀男)

学部2～4年生の英語専攻の学生の授業、「20世紀アメリカ文学」において扱っている。期間は半期完結(週2回)。作品的には以前はアメリカ文学のカノンを扱っていたが、現在は教員が作品を自由に選択できるようになった。使用テキストは *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* だったが、本が厚いため学生に不評で、それ以降 *In Our Time* に変更した。これを初めの作品から順に全て読んでいく。

原文を読むのが基本で翻訳は使わない。必ずワークシートを書かせ、その後グループ内でディスカッションをする。それから各グループの代表者がそれぞれ内容を報告しあう。学生の予習を前提とし、教員からのボキャブラリーの導入はしない。学生が理解できない部分についてはワークシートに記入してくる。

教員は、ワークシートに書かれた学生の質問を選別しながら紹介しつつ進行していく。文体の特徴に注目させ考えさせている。精読の授業ではあるが訳読は行わない。特に学生に指示しているのは、ミクロな視点(小さな言葉に注目)とマクロな視点(物語の流れ、時間の流れから全体を理解する)の双方から読むように薦めることである。

この作品を扱う効果については、英作文力など英語力を挙げることを直接の目的にした場合は正直疑問であるが、プレゼンテーション力や自分の考えをまとめる力をつけるためには有効であると感じる。

また、テキストを外れないことが結果的に授業を盛り上げることになる。1回目の授業後リアクションペーパーを回収すると、次の回がその内容から盛り上がっていく。毎月1度3ページ以上のレポートを課し、その際英文の資料に慣れさせる目的で Paul Smith の *A Readers Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway (1989)* を必ず資料に使うことを指示している。

(上西哲男)

内容読解的には難しいテキストなので教養ゼミ、基礎ゼミで使い、期間は週1コマ2週。後半の週にはディスカッションをさせ、その後別の新しい作品も扱う。テキストは註のつかないものを使用したい。この作品に限らず、扱う作品選定の基準としてはできれば複数翻訳があるものを選びたい。これは学生に翻訳の間違いを探しださせるためである。この翻訳チェックは、学生の英語についての考えを深めることになると考えている。

授業では内容についての質問に答えさせることが基本で、和訳はしない。学生には作品に自分自身で註をつけることと、問題点を探してくることを求める。学生自ら資料を探してくることを奨励し、インターネットの情報なども積極的に利用させたい。「調べること」を重視するためである。学生には、英文を引用しながら問題点を説明

させるようにしている。

（深谷素子）

最初に授業で扱ったのは10年ほど前、文学部の学部生の授業。英語力のあるクラスだった。読書会形式で、Fitzgerald, Salinger などとともに読んだ。翻訳を読まないで原文にあたらせる。物語のタイトルを消して学生に読ませ、意見をディスカッションさせた。最初に出てくる猫と最後に出てくる猫が一緒なのかについての話し合いには、必ず至る結果になった。

最近では法学部の学部生1、2年を対象の授業で扱った。学生の英語力は高い。多読の授業の中で作品のひとつとして扱った。学生に自分の好きな読みものを選ばせるのが基本だが、推薦作品としてこの作品を提示している。

その後、グループディスカッションを行う。クラスを1つ4～5人のグループに分けて、それぞれにテーマを決めて話し合わせる。具体的には Hemingway の作品、ネイティブアメリカンの神話、村上春樹の作品、黒人奴隷を扱った作品というテーマを挙げた。Hemingway の作品については“Cat in the Rain”と“A Clean, Well-Lighted Place”を扱い、教員から背景は説明せずワークシートをもとに話し合わせた。ワークシートの問題は英文で書かれているが、記入は日本語でも可とした。記入を英語にしたら学生が構えてしまい、ストレートな意見が出にくく盛り上がらなかったためである。ディスカッションのみで終わらせてしまったのが反省点である。

（北和丈）

授業で扱うことを考えた場合のこの作品の特徴としては、まず大学生が語学で読む文章としては長いということが挙げられる。また、この作品についての Wikipedia の英文説明から、この作品には内容をまとめようとする際に読者各々の解釈が入ってこざるをえないという特徴があると考え、これを逆に利用して、授業では学生に英文で解釈を書かせようと考えた。

想定するクラスは、英検準2～2級程度の英語力が期待できる大学の人文科学・社会科学系の学1～2年生のライティングの授業で、人数は20～30人。費やす時間は週1回2コマ。学生による予習は期待せず、背景的知識を問わない方針で行う。

1週目には、学生に対し「英語で英文を要約する」という目的を明示し、1つ3～4人のグループをつくらせ、作品の文章をグループの数に分割し、グループ毎に担当箇所を決めそれぞれ読ませる。読み終わったら各グループに要約の清書用の記入用紙を配布し、この時初めて「100～150語で」と具体的な分量の指示をして書かせ、回収する。授業の最後には、まとめた英文を各自で改めて読むことを宿題として指示する。

2週目までに、教員は提出された各グループの要約文をタイプしてプリントを作成しておき、授業でそれを配布し、クラス内での最優秀作品を選ぶという目的を伝え、各

自に読ませる。グループ毎に出た選考結果を選考理由と共に確認し、集計の結果最優秀作品を選ぶ。その後 Wikipedia におけるこの作品の英文の要約を転載したプリントを配布し、各グループの要約と比較させて共通点と相違点をグループ内で話し合わせる。クラス全体で話し合いを総括し、「要約」のあり方、文体の特徴について考えさせる。

（関戸冬彦）

想定するクラスとしては、この作品が簡単ではないことから英語が苦手な学生は無理ということになる。ただし学年は問わない。かける時間は週 1 回 1～2 コマ。（予習を前提とするなら 1 コマ。）

提示するテキストは分量にして A4 用紙 1 枚で収まる範囲。タイトルを消して誰が書いたかをあてさせたり、文章の順序をバラバラにして正しく並べかえさせたりというのもアイデアとしていいと思う。

授業では訳読は基本的にしない。そうすると和訳の正誤に学生がこだわるので、要約させることのほうが有効だと思う。要約をグループ毎に英語でプレゼンテーションさせる。クラスの盛り上げ方としては、授業内で毎回チャンピオンを決めて競わせることがよいと思う。

（木下裕太）

法学部出身の自身の経験から文学部以外での授業を想定してみたが、その場合授業のゴールとしては英語が好きになることで十分だと思う。テキストの提示の仕方としては、作品を読み終えることが重要だと思うので、翻訳をつかっても構わないと考える。

例えば法学部の場合だと、学科の性質上全行訳読をむしろ学生は好むと思う。クラスの盛り上げ方としては、学生に感想を述べさせることが英語に興味をもたせる事につながる。解釈よりも読みきった思い出ができることが重要なのではないか。

（森田英津子）

自分が学部 3、4 年生の時に受講した「英文学」の授業でこの作品が扱われた。受講人数は 15～20 名程度。かけた時間は週 1 回の 3 コマ程度。1 週目の冒頭に原文が配布され、授業内で黙読、クラス内で 3 グループに分かれディスカッションをした。2 週目ではディスカッションのまとめをし、各グループの代表者がプレゼンテーションを行う。3 週目には全体のまとめをし、最後に短めの英文のレポート提出。

物語の解釈も含めた授業だった。受講学生にとって、英語自体は難しくは無いが解釈の面では難しかった。予め基礎ゼミなどで英文学を学んでいると、解釈の点でより深く理解できると思う。また、読解に関しては複数週かけて読むほうがよいと感じる。

精読することで英文の読解力、レポートにより **writing** 力、プレゼンテーションによりまとめる力がついたと感じる。この作品の長さなら受講学生がきちんと読めたので盛り上がった。

(フェアバンクス香織)

扱った経験のある授業は2種類ある。ひとつは学部3年生ゼミで12人を対象に *In our Time* を読んだ。それぞれの箇所について発表者を決め、準備させた。もうひとつは短大1年生の「英米文学」の授業の最初で“*Cat in the Rain*”を扱っている。クラスの人数は45人。かける時間は学部生の場合週1回1コマ、短大生の場合週1回3コマ。

短大の場合、作品を2つに分けて1、2週目で読み、最後の週はディスカッションをする。授業の各回の前に、学生の予習を確認するための単語テストをする。“**study**”が「じっくり見る」等、この作品には複数、予習をしている学生でなければ頭に浮かばない単語の解釈があるため単語テストにより学習状況がわかる。それをきっかけに辞書の調べ方を教える。

また、学生の解釈の確認、英文自体をきちんと読めているかについての確認という、2つの点からの確認目的で教員から質問を提示し、グループディスカッションをさせる。グループとしての意見を求めると、気後れせずに発表できるようだ。その際必ず証拠を挙げさせるようにしている。ディスカッションをさせると意見がさまざま出るため盛り上がる。

翻訳があること自体を知らない学生もいるが、学部生になるとこの作品の妻の名前が明記されていない等、原文を読んでいなければ気づかないことにまで気づく人も出てくる。

また短大の場合は、ディスカッションの最中に教員がクラス内をまわるようにし、英語自体に関する質問が出た場合はその際に個別に受け付けている。英語の構文の説明の面でもとても使いよいテキストだと感じている。

[4] 自由討論 (ここから、小笠原亜衣、星久美子参加)

1. 訳読をするかしないか？

(倉林) 個人的な意見としては、物語の内容を感じ、考える力発表する力を身につけてほしいから、訳読はさせたくない。この作品を扱うクラスは、ある一定の英語力のレベルを越えていることが前提となるだろう。

(フェアバンクス) 部分的に文章を解説することはあるものの、全ての英文の訳読はしない。英文のテキストは、作品全体を掲載しているもの、一部分を掲載しているもの、リトルド版などがある。文学作品を英語の教科書にするうえで、どこまでを認めるかを教員は考える必要がある。

(関戸) 個人的には翻訳対原典というのに懐疑的だから、リトールド版も利用できると考えている。

(上西) 自分の授業では翻訳の間違い探しを重視しているので、それにより結果的に訳読をすすめていることになるのかもしれない。

(関戸) その点は教員の授業の運営の仕方にかかっていると思う。授業中に教員と学生1対1の関係を発生させることになるような訳読には反対だが、クラス全体に日本語訳のコンペをさせるのはよいと思う。

(上西) 学生に翻訳に対する疑問を持たせると、必然的に英文についての自分自身の解釈を持たせることになるので、有効だと思う。

(北) 原文を読ませた後にそのまとめを英文で書かせる自分の授業案は、あくまでもある程度の英語力を備えている学生向けであり、どの学生にも適用できるわけではない。また、この案はグループとしてやらせることで可能になり、ひとりだと盛り上がりがないように思う。

2. グループディスカッションについて

(上西) クラス内で各グループに解釈についての質問をつくらせ、それについて他のグループに答えさせる形式で行う。グループは教員が決める。

(深谷) グループは教員が決め、同じグループに知り合いばかりが集まらないようにする。クラス編成の際に行われているプレイスメントテストの結果を参考に、各グループの英語力がほぼ同じになるよう振り分けるのもよい。ディスカッションは、読解の多面性を気づかせる目的で、各々面白いと思う場所と理由を選ばせて発表させる。

(北) 個人的には、学生の自然なグループ化を利用した方が良い話し合いができる気がする。教員がグループを編成することになると、授業内である程度時間をさくことになるため、あまり好きではない。

(深谷) 経験からいうと、学生の自然なグループ化を利用すると、話し合いが良い方向に向かう時と悪い方向に向かう時の両方の可能性がある。グループの中に親密すぎる友達同士が含まれた為に、他の人がやりにくくなることもあった。

(上西) クラス内の仲良しを早く認識して、それを分かれさせる苦勞をした。社会に出ると合わない人とも作業しなければならなくなるので、教員の側からのグループ決定は必要。

(深谷) 文学作品の読解作業は最終的には個人の読みに頼ることになるので、読者の個人的な物の考え方に関わっていくことになる。そのような考え方は、相手が仲良しであればあるほど逆に隠してしまおうとする人もいるから、率直な意見を出すためにも、初対面の人との話し合いのなかで意見を語らせることも必要である。

(森田) 学年混合の授業で仲良しと分かれる機会がある方が、ディスカッションで様々な意見が聴けることになり良かった。

(倉林) 自分の場合は全学年を含む授業なので、学年を縦に分けてグループ化した。4年生をリーダーにして他の学年についてこさせるようにした。

(関戸) ディスカッションを盛り上げる方法であるが、この物語を実写版にした場合配役をどうするかとか、もしこの物語を日本を舞台につくりなおした場合どの土地で展開されるのがよいか、などについて考えさせるのはよいと思う。

(上西) 夫婦の年齢設定の解釈について話し合うのも面白い。

3. この作品を扱った後の授業計画について

(上西) 巧妙に学生の英語のレベルをあげたい。Faulkner の“A Rose for Emily”とか。

(木下) “Cat in the Rain”と比べて結末がわかりやすいという点では、それはいいと思う。

(山本) “Cat in the Rain”より英語のレベル的には上がって、内容理解はわかりやすくなって。

(北) 猫つながりで何か探すというのは？

(関戸) 雨つながりもありかもしれない。

(田村) 雨に関してなら“Cat in the Rain”は、同じ Hemingway 作品の *A Farewell to Arms* と並べて批評されている。

(関戸) タイトルの音が何となく似ていると言うことで J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* とかは (笑) ?

(小笠原) Salinger なら “A Perfect Day for Bananafish” は? わからないところから意味を見つける面白さを探す意味では良いし、不妊の問題も扱われている。Salinger なら “A Perfect Day for Bananafish” は? わからないところから意味を見つける面白さを探す意味では良いし。

(倉林) “Indian Camp” から “Three Shots” の順で読むようにしている。教員としては学生に種をまくことが必要なので、最終的には読む作品を学生が勝手に考えられるようにするのが理想。“Cat in the Rain” の後だったら *Out of Season* を学生に読ませるのはどうか。

(小笠原) “Out of Season” であれば内容的にも不妊、墮胎の問題とつながりがあるのでいいのでは。

(山本) ヘミングウェイではなく、同時代作家 F. Scott Fitzgerald の作品はどうだろうか。

(深谷) F. Scott Fitzgerald 作品は難しいと思う。“Cat in the Rain” とあわせて “Absolution” を扱ったことがあるが、こちらに苦労している学生がいた。

(上西) しかし、Fitzgerald は学生に翻訳チェックをさせる題材としてはふさわしい。

(山本) 例えば “The Great Gatsby” の冒頭だけ扱うのというのは?

(上西) 翻訳チェックという意味では少し難しめの物語の方が向いている。村上春樹の翻訳を使うのもやりがいがある。

4. “Cat in the Rain” の夫人の不妊の解釈について

(深谷) 夫人が猫を欲しがるのは、自身が不妊であることを示しているという解釈がかなり主流であると感じるが、実際に彼女の不妊について原文から直接的に断定できるのか?

(小笠原) ある女子大でのディスカッションでは、いつ行っても学生の意見が毎回不妊

の連想に行きつく。女子学生はその点に敏感である。

(上西) これは男子学生にはできない解釈。

(山本) David Lodge や今村楯夫氏も不妊説をあげている。

(小笠原) この物語で夫が妻の髪が短いほうが良いという場面があるが、女性の場合の去勢は髪を短く切られることととらえる高野泰志氏の解釈もある。

(山本) 今回のワークショップくらい盛り上げられたら、その授業は成功と言えるでしょう。授業をつくりだすには、学生も教員も苦勞しながらさまざまが工夫が必要であることがわかっただけでも本ワークショップの意義があるでしょう。
皆様どうもありがとうございました。

以上